

ンリは基本的に、人間の生や絶対的〈生〉の存在や現実存在をカッコに入れて、生の現れの実在性を徹底的に追究する。しかし「キリスト教の哲学」には、ヨハネ福音書に関する議論を通して、絶対的〈生〉の絶対的現実存在(実存)に言及してしまいう箇所がある。現象学的に見れば排除されるべきこの言及こそ、アンリ自身の実存変容の帰結を如実に顕にしているように思われる。

アンリの思想は、個人的体験や思想家との出会いによって根本的に変化することが多い。「キリスト教の哲学」に関しても、聖書の「再発見」という出来事によってアンリ自身の実存が変容し、そうして彼は「キリスト教の哲学」の諸著作を書くに至った、と彼自身ある対談で証言している。アンリにとって、聖書の再発見は、思弁的なレベルで聖書を新しく解釈したことではなく、自身の実存を変容するような、行為や実践のレベルにおける衝撃だった。先に述べたエゴイズムの救済理論に即して考えれば、この衝撃に促されて「キリスト教の哲学」を書くという一連の流れは、まさにアンリ自身のエゴイズムからの救済の過程であり、救済の実践だったのである。

そうであるなら、「キリスト教の哲学」にとって聖書のことばは必要不可欠なものである。アンリは、実存を変えた聖書のことばと、実存の変容の帰結である現象学的体系とを併記することによって、聖書との出会いがどのように自分の実存を変えたかをドキュメントとして表現しようとした。そうして、「キリスト教の哲学」は、エゴイステイックな人間の生の救済の理論かつ救済の実践となったのである。

理性と文化の関係について

——グローバルizm批判の視座を求めて——

八巻 和彦

ネオリベリズムのイデオロギーならびにそれに強く影響された思想である「グローバルizm」Globalismは、技術的展開過程としてのグローバルゼーション Globalization を利用しながら、経済活動の標準を地球規模で均一化することによって、特定の勢力が世界中で経済的覇権を確立し、それを文化的支配、政治的支配にも利用しようとするものである。その標榜者たちは、その主張の根拠 Reason として、自分たちの理論こそが「合理的 rational」(つまり理性にかなっている、理性的)であるのだから、当然、それが地球規模で実現されるべきであるとする。そして、この思想の実践に反対する人々に対しては、「反グローバルizm運動は理性的なものではなく感情的反発に過ぎない」と、マスメディアなどが批判する傾向が強い。

確かに経済学には数学が応用されているが、当然のことながら経済学には数学以外の要素も存在しているのだから、数学のように地球規模での普遍妥当性を主張する根拠はないと言うべきであろう。そして、地球規模で軋轢を起こしているグローバルizmに理性的に反論するためには、理性というものについて冷静な考察が必要とされるだろう。そこで、本発表では、「理性と文化の関係」に照準を当てて考察を進める。

そもそも「理性」という人間の精神的能力を単独で取り出すことができて、それに対して「感情」という人間の精神的能力が存在しているのだろうか。清水哲郎(『事典 哲学の木』)も

指摘しているように、理性という人間の精神的能力を単独で取り出すことは不可能である。ある命題をわれわれが理解できたときに、「それは理性的な主張である」とか、「それは合理的である」と判断するのである。この理解の成立を分かりやすくするために〈納得〉と表現した上で、その〈納得〉の成立の条件を検討してみると、言明を出す側とそれを受け取る側のそれぞれが想定している説明の地平(問答の設定されている Milieu)が合致して、はじめてそこに〈納得〉が成立することが分かる。〈納得〉の成立には必ずしも自然科学的な正当性が必要とされるわけではなく、逆に、いかに自然科学的な主張が主張されても、その言明を受け取る側がそれを求める側と同一の地平に立っていない場合には、そこに〈納得〉が成立することはない。ここに理性と文化が相互依存関係にあることが明らかになる。従って、人間の具体的生活において互いの〈納得〉を成立させるものとしての理性は、文化の多様性に応じて多様かつ多層的であることになる。

しかし、われわれはここで、理性が根本的に相対的なものであると主張するものではない。『宗教研究』三四五号に掲載された拙論『文明の衝突』の時代の宗教寛容論で説明した「人間の生活活動の三層構造」を一方の基盤にしつつ、同時にホルクハイマー(M. Horkheimer)がすでに六五年前に指摘した「道具的理性」という視点を活用することで、グローバリズムを典型とする現代の理性理解が、きわめて狭隘で不適切な理性理解であることを指摘したい。つまり、自然科学やその応用たる技術の世界で使用されている理性は、How という問いを

立ててそれに答えるものではあるが、人間の問いはそれに尽きるものではない。人間はむしろ本質的な問いとして What とか Why を問うものであり、そこに答えることを試みるところにこそ人間の本来の理性の存在意義があるのではないだろうか。すでに古代ギリシアのソクラテスが自然学の探求に落胆して哲学の探求へと転向した事情と同一である。現代においても、この本質的な問いを提出することを相手側に認めず、つまり本来の理性の使用を許さずに、「道具的理性」の地平でのみ要求を突きつけて続けていることが、今、地球規模で軋轢を起こしている理由ではないのだろうか。

イタコたちの現在

——大和宗を中心にイタコの研究史的回顧と現状——

原 英子

口寄せで有名となったイタコも二〇一一年と一二年は恐山で二名、川倉で一名となり、百石の法運寺と弘前の久渡寺では誰も来なくなってしまった。大勢のイタコが来て口寄せするイタコマチの風習は過去のものとなりつつある。岩手県には視覚障害のある巫者たちが組織する宗教法人大和宗がある。本山は聖徳山大乗寺。ここでも常時活動に参加する僧侶は五、六人となっていた。大和宗を中心に研究史的回顧と問題の指摘を行いたい。

堀一郎は盲巫への関心から一九五〇年代に大和宗に言及した。その後シャーマニズム研究が盛んになり、イタコなどが注目されるなか、大和宗でも盲巫を焦点とした研究がなされてき